



スクールカウンセラーの効果的な活用

■ 各種会議等での 助言・指導

- 不登校児童生徒の状態や援助の在り方について正しいアセスメントを行い、情報や対応策を共有化するためにも、学校ではできるだけ生徒指導委員会等の定例会にSCが参加することが重要である。校内における生徒指導上の課題や、問題を抱える児童生徒の理解にSCの指導・助言を受けており、効果を上げている学校もある。
- SCの専門性を生かす手立ての一つとして、校内研修でのSCの活用があげられる。「個を大切に」「背景を理解する」など臨床心理学的な視点が、教職員の児童生徒の理解の幅を広げ、結果的に問題行動の予防効果が高まった例も見られる。また、特別支援教育に精通しているSCも多く、児童生徒への対応に大変役立っているとの話も多く聞かれる。

- ◆ J中学校では、勤務時間の関係で週1回実施の生徒指導委員会には出席していないが、関係教職員へのコンサルテーションを重視するとともに、月1回実施する不登校対策委員会に参加してもらっている。
- ◆ K中学校では、夏季休業最終日に生徒指導研究協議会（全教職員参加）を実施し、SCを講師に迎え、不登校等の事例研究を通して研修を深めている。

■ コンサルテーションの 重要性

- 学校における「コンサルテーション」とは、教職員や保護者に対し、臨床心理の専門家であるSCが様々な形でアドバイスを行うことである。例えば、ある生徒から相談を受け、その生徒への対応のことで教員といろいろと話し合っているとしたら、それはすでにコンサルテーションを行っていることになる。コンサルテーションは、教員を介した児童生徒への間接的な援助とも言える。

- ◆ あるSCは、SC活用の最大のポイントとして、「SCのコンサルテーションの重視」をあげた。この中学校では、コンサルテーションを週1回開催し、そこには学級担任だけでなく、学年主任、生徒指導主事、養護教諭等も必ず参加している。1つの問題に対し、複数の教職員が話し合うことで、1人の教職員の責任ではなく、同じ意識をもって、みんなで取り組んでいるという指導体制がつけられることになる。この方式を続け、この中学校では、現在不登校生徒数が激減している。
- ◆ L中学校では、SCのコンサルテーションについては、毎回生徒指導主事が受けるかたちをとっている。SCの相談記録（教職員への今後の対応についてのアドバイスが具体的にまとめられている。）の該当部分のコピーを関係する教職員に配付している。さらに詳しく聞きたい教職員は、SCに直接聞く体制をとっている。

■ 活用の工夫と 弾力的な運用

- 勤務時間の制約等を考えると、学校としてのSC活用のビジョンを明確にするとともに、「週6時間ではしょうがない」から「週6時間をどう生かすか」という発想の転換が必要であり、学校の実態に即した活用の工夫及び弾力的な運用が求められる。

- ◆ M中学校では、1日6時間勤務のところ、2日間を7時間と5時間に分けて勤務する形をとっている。7時間勤務の際に、生徒指導委員会に出席したり、教職員へのコンサルテーションを重点的に行ったり、家庭訪問を行ったりしている。
- ◆ 中学校区の小学校への対応を定期的実施する意味で、年間30週の勤務日のうちの10日間を小学校に派遣し、小学校における問題に対応する「小・中学校連携配置」を実施している地区もある。小学校時代でのSCによる働きかけが、中学校段階での問題出現の抑止力になるケースも数多く見られる。